〔千葉医学　83：121，2007〕

〔編集後記〕

私のようなものでもいくつかの雑誌の編集委員を仰せつかっている。海外の雑誌のほか，国内の英文誌や和文学会誌などである。原稿がどんどん集まる雑誌，不足気味の雑誌などさまざまであるが，概してImpact Factor（IF）の低い雑誌は人気がないのだという。IFのつかない雑誌は論外らしい。IFは米国に有利とされ，その問題点はさまざまに指摘されて広く知れ渡っているはずだが，実際にはわが国でも業績の評価に広範に利用されていて，研究者の将来はIFの総計により決まるといわれるまでになってしまったようだ。

IFのない雑誌であっても優れた論文が掲載されていることは，この千葉医学雑誌の内容をご覧いただけば明らかである。しかし，世の中はIF全盛である。IFの高い雑誌に掲載された論文は（一応）文句なしにすばらしいものだということになっているらしい。しかし実際の論文は，top journalといわれている雑誌の論文でも，まさに玉石混合といってもよい（もちろん玉のほうが多いはずだが…）。「それは日本だからでしょう。アメリカの医学界はフェアだから，そんなことはないはず」という考えは甘い。つい先年，医師なら誰でも知っている米国の超一流誌に著明な医師による薬剤の比較試験の論文が掲載されたが，そのデザインの不適切さを指摘したのは医学界の人間ではなく，一般誌の編集委員であったのは，記憶に新しい。もちろん「きちんとした」査読を経て掲載された論文である。

しかし，優れた論文がIFの高い国外の雑誌に集まる傾向にあるのは否定できない。これには先のIF優先主義が大きく影響している。知りあいの英国人が，「最近，優れた仕事が英国の雑誌でなくアメリカの雑誌に投稿されている」と今になって嘆いているが，当然の結果と思う。まず出来のよい論文は米国の雑誌に，次に欧州の雑誌，ついで日本の英文誌，どうしてもだめなら和文誌に，という暗黙の序列が形成されており，この傾向はますます強まっているように見える。当然米国の雑誌に掲載された論文の版権はあちらに帰属しており，知的財産は彼の地にある（これに対抗して，千葉大学附属図書館が「CURATOR」（千葉大学学術成果リポジトリ）として大学の論文を集積しようとしている努力はもっと評価されるべきであろう）。

一方，近年の傾向として雑誌のonline化があるが，これには面白い効果もある。私の関係しているある和文誌では，英語論文が約半数を占めるが，海外からのダウンロードが意外にも毎月膨大な件数に達するという。以前であれば図書館で実物を見るしかなかったため，minorな雑誌に掲載された論文はその存在さえ知られることがなかったが，最近はLancetに掲載されても日本の○○学会誌に掲載されても，MedlineやSciencedirectなどを利用すれば，雑誌の「格」に関係なく，同じような条件で読者の目に触れることができるようになった。IFの高い雑誌に出さなければ読んでもらえない，という時代ではなくなってきている。

以前から日本独自でIFに相当する評価法を作成すべきだと機会あることに説いてまわってきたが，私の言うことでは誰も聞きたくないのか，それとも面倒なのか，まだ目に見える形では動いていないようである。先年，フランス人の研究者と話していて業績評価の話題になった。あちらの研究者の業績評価にはフランス語で書かれた論文の存在が必須とされていることを知り，わが国との差に愕然とした

このままでは，頭脳流出ならぬ論文流出で，わが国の雑誌の弱体化，二流化，三流化は必至である。これを防ぐためにも，わが千葉大学でも，日本の雑誌を大切にするような評価指標を作成できないものかと思う。さしあたっては，千葉医学雑誌のポイントを「はなまる」にしてはどうかと思うのだが……。

（編集委員　亀井克彦）